【2用　語】

【移徙：わたまし】「いし」とも読む。移転、身分の高い人の転居を敬っていう語

【進上：しんじょう】差し上げること、進呈、献上

【仕合：しあわせ】幸運、運命。ほかに、ありさま・処理・始末など、幸・不幸にかかわらず用いることもある。

【恐々謹言：きょうきょうきんげん】書状の末尾につけて敬意を表す慣用句。敬意の度合によって「恐惶謹言」とか「恐惶敬白」と記すこともある。

【2解　説】

「老中連署奉書」（ろうじゅうれんしょほうしょ）とは、一般に将軍の意思や命令を奉じて幕府の老中が署名・連判して、大名などに下知（命令）する文書のことで、「老中奉書」は江戸幕府の意思伝達を媒介する文書の中で最も重要かつ代表的なものの一つとされている。

本文書の様式上の特徴は、料紙（使用する紙）の横中央部で折り返し、折り目を下にして文字を記すことである。これを「折紙」という。料紙の全紙にそのまま記す「竪紙」と比べて略式であることを示している。

本文書の内容は、延享二年（一七四五）新たに九代将軍となる徳川家重（いえしげ）が江戸城本丸へ転居した際に、沼田藩主土岐家（伊予守頼熙・よりおき）からお祝い品が献上され、それに対する儀礼的な返礼状である。「老中返札」として区別されることもある。なお、三名の老中のうち松平乗賢（のりかた）は美濃国岩村藩主、本多忠良（ただなが）は下総国古河藩主、酒井忠知（のち忠恭・ただずみ）は上野国前橋藩主である。